

れば、其の上には位を襲ひし可汗の名の存したるべきは明らかにして、且つ此の新可汗が頓莫賀なるべきことも、下に述ぶるが如く疑無ければ、此の點よりすれば氏の見方と填補したる文字とは當を得たるが如く、従て七十五字を以て碑文の全長と見ることも正しきが如しと雖、然も注意すべきは、碑文には歴代の可汗の名は皆其の徽號の全體を記して冗長繁雜を厭はざるに、何故に獨り此の可汗に限りて其の徽號を記さずして、單に頓莫賀と記したりやの疑を挾むべきこと之なり、頓莫賀は曰ふ迄も無く可汗の徽號には非ず、可汗としては合骨咄祿毗伽可汗と曰ひしこと本論に於て見たるが如し、Schlegel 氏の見解は全く此の點を無視せるものにして據るべきに非ること殆んど疑無し、又此の碑文の書き方を考ふるに、凡そ可汗の名の上、若しくは可汗なる文字の上には各々一個の空格を有せること V 59、VI 25、XI 15、XI 39、XI 55 等に於て認むるが如し、然るに今此等の三字を可汗の名なる頓莫賀と見れば、其の間に空格を存すべき餘地なく、獨り此の場合に限りてのみ特種の書き方を爲せしものと見ざる可らず、之豈適當の見解ならんや、若し此の間に一字の空格を認めば可汗の名は只二字を以て表はされたるものにして、頓莫賀の三字を容るべき餘地の存する無く、止むを得ずんば此の場合に限りて可汗の徽號の略稱を用ゐたるものと解すべけんも、此の如きは全體の書き方の上より固より認め得べきに非ず、されば此の場合に於て最も穩當なる解釋は X の末に頓莫賀達干の可汗としての徽號なる「合骨咄祿毗」XI 1 に「伽」なる文字が存したるものと見るべきことなるべし、而して X の現存文字の下端なる「往來教化」と此の「合骨咄祿毗」との間には、幾何の文字の存せしかは固より知り得べきに非れども、少くとも Schlegel 氏の想像せるが如く「教化」なる文字の下に直に可汗の徽號が接したるものとは見得べきに非ず、碑文の書き方を考ふるに、可汗死して其の子位を嗣ぎたる時は「……子_{空格}